

ケータイによる「しきり」のメディア論

新潟大学人文学部

中村隆志

takashi-nakamura@human.niigata-u.ac.jp

従来のケータイのコミュニケーション研究とは異なり、本研究では、ケータイの「しきり」あるいは関与シールド(ゴフマン, 1974, 誠信書房)の機能に注目する。「ケータイを使用している」という自己演出を通して、ケータイが気まずさやトラブルを回避するために使用されている実態を解明する。筆者の先行研究において大学生にアンケート調査を行った結果、ケータイ使用者は状況に応じてケータイを関与シールドとして使用していることが示唆された。本研究では、さらに公共空間以外を含めたケータイ使用についてアンケート調査を行った。その結果、目の前に居る人との関係を調整するために使用されていることが示唆された。このことは、ケータイという情報通信機器が、遠隔通信を行う本来の機能の他に、目の他者に対して、「ケータイを使用する私」という自己演出に自覚的に使用されていることを示すものである。

1: 演出行為としてのケータイ使用

特に親しいわけでもない顔見知りとたまたま居合わせる状況になった時、あるいは話をしづらい相手が視界内に居る時、ふとケータイを見ることでその相手との接触を避けようとした経験のある人は、読者の中にも少なからず居るだろう。玄関の扉を一步出たその瞬間から、我々は不意に訪れる気まずさと共にある。無垢な観察者になれない我々は、その時点での自らの関心の所在が他所にあることを注意深く演出することで、周囲に潜む多くの難を逃れ得ることを知っている。自らの人間関係の入口となり、多くの情報源ともなるケータイを使用することは、自らの関心の所在を示す、簡便にして最適な演出の一つになるだろう。

従来のケータイに関するコミュニケーションの研究では、使用マナーの問題、家族友人などとの関係の変化、新しいコミュニケーション法、仕事や余暇の変化、有害情報の危険性などが論じられてきた(例えば[1])。特に公共の場でのマナーの低さや選択的なコミュニケーションの持ち方が問題とされ、公共の場での暗黙のルールが乱されていることが指摘される。声高に通話する軽率さや個室内に居るかのような自己中心性を戒めることは必要である反面、これらの指摘からで

は、他の人の目の前でケータイを使用することの意味、とりわけ「ケータイを使用する私」イメージを周囲に演出する行為を分析することには至らない。

ケータイを使用するイメージを演出することは、通話やメールといったケータイの「本来の」機能から外れる使用方法である。中村[2]は、この自己演出機能が、公共空間において多くの場面で使用されており、かつ場面によって使い分けられていることを指摘した。しかし、ケータイ使用者が行う自己演出は、公共空間だけには留まらない。本稿では、公共空間以外の場面、つまり、よりプライベートな場面においても、自己演出機能が使用されていることを、アンケート調査の結果から指摘する。「本来」でない使用法は、まさに消費者側によるケータイ使用のイノベーションであり、今後のケータイのデザインや小型化に少なからず影響を与えるものと推測される。

2: 対面的相互作用と関与シールド

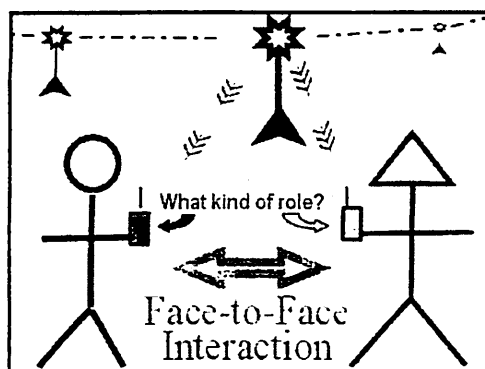
ゴフマンは同じ視界内に人々が居合わせる時、お互いの身体が、その意図の有無に関わらず、情報のやりとりを行っていることを指摘し、その情報のやりとりを対面的相互作用と呼んだ[3]。目のやり場はもちろん、ちょっとした仕草や身体

の動きが様々なメッセージを発信してしまう。体格、服装、髪型、持ち物、声などもメッセージに含まれる。視界内に居る者同士は、互いに様子を探りながら、互いに相手を自分流に解釈する。言葉をほとんど介さないが故に、そのメッセージは発信者の意図と大きく異なる解釈をされ続けることもある。メッセージをどう受信してどう解釈するかは、その一切が受信者側に任されているからだ。一人で居る空間から一歩外に出れば、望む望まないに関わらず、何らかのメッセージを発信してしまい、自らの身のこなしに対するリアクションであるかどうかさえ定かでないメッセージを他者から受け取ることになる。途中でやめることは簡単ではない。他人と空間を共有する限り、身体を持つ我々はこのような情報発信と誤解を含んだ相互解釈が連鎖する対面的相互作用をやり続ける。

本研究が注目するゴフマン理論において、もう一つ重要な概念として関与シールドがある。それは、例えば、雑誌、文庫本、たばこ、ポータブル音声プレーヤー(原著ではラジオ)、サングラス、日傘などであり、使用者の関心を集中させたり、使用者の関心の所在を隠蔽したりするものである。関与シールドを用いることで、人々が雑踏や公共空間の中で、対面的相互作用の連鎖を一時的にせよ、遮断することができる。また、使用者は自らの興味関心の所在が身近にあることを周囲に演出すること、さらには興味関心がどこにあるのかを周囲に悟らせないようにすることができる。この結果、周囲の人々との対面的相互作用の連鎖をある程度抑えることが可能になる。

3: 関与シールドとしてのケータイ

前述のごとく、我々が身体を持つ限り、対面的相互作用から逃れることは難しい。自らが発してしまうメッセージは、周囲の人々との気まずさやトラブルの種を大きくする危険がある。我々は注意深く振る舞わねばならない。そこで我々は関与シールドを使用する。現代の我々は最も有効な関与シールドとしてケータイを持っている。関与シールドとしてのケータイの有用性は高い。多くの場合、我々はケータイを手にとって画面に視線を向けるか、あるいは耳にあてて通話する。主な注意をケータイに向けることにより、自らのその時点での注意関心が、他でもない自分の手元の機械に向いていることを周囲に演出できる。公共の場で他者を観察、凝視することは一般的なエチケットに反するが、一方で他者への警戒心を解くことも容易ではない。相反する行為を実現するため、周囲の他者よりも、より高い関心をもつべき事柄を持っている自分自身を演出することになる。ケータイはその時の注意関心が手の届く範囲のごく近距離にあることをアピールできるため、我々に要求されている演出を簡単に実現する。我々は、公共空間において、視線を向けてくる他人に自らの意図を探らせない「自由」をケータイに求めているとも言えるだろう。この自由は、ケータイが時と場所を問わず、着信者の都合を配慮せず、いわば「暴力性のあるメディア」[4]として、着信者の行動を制約する可能性がある故に、手に入れられるささやかな「自由」なのである。



中村[2]はケータイの関与シールドとしての有効性を指摘した。公共空間におけるケータイ使用者は、状況に応じて、ケータイの自己演出機能を有効に利用している。しかし、対面的相互作用において自己演出が必要になるのは、公共空間ばかりとは限らない。対面的相互作用は、同じ空間を共にする人々全てと交わされる。家族、いつも話す友人、仕事やアルバイト仲間などを相手にする場合にも、時として自己演出が必要になるだろう。平岡・馬立[5]は、大学生を相手に調査を行い、多くの大学生が家族と食事中にもケータイを手放さないこと、家族が揃うリビングにおいて家族の面前でもメールのやり取りを行っている(通話は控えている)ことを指摘した。このことは家族との会話ややりとりの間に日常的にケータイが介在していることを示している。

4: 調査

ケータイによる自己演出の必要性を明確にするため、大学生を対象にアンケート調査を行った。時期は2005年7月、対象は新潟大学生73名である。中村[2]に基づくケータイの関与シールド性についての解説を行った後、1週間自分の行動に注意して、誰かと居る時にふとケータイを使用したくなる欲求を感じる場面があったらそれを記憶しておき、1週間後にその場면을最大5件まで記述して呈示することを求めた。場面の記述の仕方には特に制限を与えず、自らの経験に基づいて自由な表現で回答するよう求めた。記載漏れなどを除き、計337件の回答が得られた。

自由な形式での回答であるため、曖昧な表現、重複する表現が多く、定量的分析は困難であるが、一方で、観察力に富む回答が得られた。具体的な例を以下に挙げる(原文の一部を筆者が省略・改変している)。ほとんどの回答者が挙げているのが

A: 退屈しのぎ

の使用法である。また、知らない他人と居合わせの際に相互作用を遮断するために

B: 公共空間で関与シールド

も多数を占めた。具体的には

B-1: 交通機関や食堂で他人と相席の際

B-2: 路上でピラ配りや威嚇的な人为了避免するため

などが挙げられる。また、公共空間での使い方はあるが、

B-3: 待ちぼうけ中に、「孤独な人」と周囲

の人達に思われぬようにするため

という、関与シールドの延長上にありながらその役割を越える使用法も見られた。また、

C: 友人・家族に対して

も、実に多くの場面で多くの使用が為されている。典型的な例を列挙する。

C-1: 親しくない知人とすれ違うとき

C-2: あまり話したことの無い先輩の車に乗せてもらったとき

C-3: 友人との会話が途切れたとき。

C-4: 好ましくない話題になったとき

C-5: 複数の友人といて話に入れなかったとき

C-6: 家族と親戚の家に行き、干渉されたくないとき

C-7: 家族でテレビを見ていて、いやらしいシーンが出たとき

相手の親密さなどに違いがあるため、一般的な傾向を述べるには至らないが、これらの事例が意味することは、使用者が相手との関係を閉鎖

的に拒絶しようとしてケータイを使用しているのではない点である。彼らはその場面でのケータイ使用の必要性は感じて、その後の相手との関係がある程度維持できるようにしている、と言えるだろう。彼らは目の前の家族・友人との関係を調整するためにもケータイを使用しているのである。

5:しきり

調査対象が、大学生だけであり、また、彼(女)らは、2005 年度に大学生である世代であるため、本調査では、一般的な傾向を述べるまでには至らない。また、自由回答という形式であるため、本報告では典型的な事例の列挙に留まった。しかし、これらの事例からでも、彼(女)らは、自分たちがケータイを使用している行為自体がメッセージを発していることを自覚しており、そのメッセージを利用していることがわかる。ケータイ使用は傍若無人なものとは限らず、むしろ、目の前に居る相手との関係を調整するための行為でもあると言えるだろう。

柏木は、日本の衝立、屏風、障子などを可動式のあいまいな「しきり」として、社会的関係を調整する道具としている[6]。それは、「共在」する相手の事情や心情を察しながら、不用意に干渉しない・させないことでお互いの関係を維持するツールでもある。ケータイもまた、まさに「携帯」しているが故に、着脱可能なあいまいな「しきり」として人と人の中で機能しうる。ケータイは、社会的関係を調整する可動式のしきりとも捉えられるだろう。この観点を今後の調査につなげていきたい。

ケータイを悪玉とする考察は可能である。便利さと弊害とのバランスの必要性を説くことでケータイを戒めのついたツールと位置づけることもまた可能である。しかし、それらの論は、目の前に他人がいる状況で、我々がケータイを切実に必要としている実態を見通すことには至らない。ケータイの有用性は、その本来の機能を越えたところにもあり、我々はそれを発明・発見しながら利用しているのである。

引用文献

- [1] 岡田朋之, 松田美佐, 2002 『ケータイ学入門』有斐閣選書.
- [2] 中村隆志, 2006, 「対面的相互作用におけるケータイ使用と「しきり」のメディア論」, 第 23 回情報通信学会大会当日資料 (<http://www.jotsugakkai.or.jp/2006/PDF/6-25/25-G-nakamura.pdf>)
- [3] ゴフマン, E., 1974 『集まりの構造』(丸木恵祐子, 本名信行訳) 誠信書房.
- [4] 吉見俊哉・若林幹夫・水越伸, 1992, 『メディアとしての電話』弘文堂
- [5] 平岡善浩・馬立歳久, 2006 「モバイル時代の「家族」と「住居」」, モバイル社会シンポジウム 2006 当日資料, モバイル社会研究所 (http://www.moba-ken.jp/symposium/shiryu/hiraokamadachi_new.pdf)
- [6] 柏木博, 2004, 『「しきり」の文化論』講談社現代新書.